



TITLE:

アポリネールとmimétisme :  
<<ZONE>>をめぐって

AUTHOR(S):

森田, 郁子

---

CITATION:

森田, 郁子. アポリネールとmimétisme : <<ZONE>>をめぐって. 仏文研究 1992, 23: 135-159

ISSUE DATE:

1992-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/137787>

RIGHT:

# アポリネールと mimétisme

——《ZONE》をめぐる——

森 田 郁 子

## はじめに

Apollinaire は詩においてもロマンにおいても、自己の出生から死に到るまでの「自伝」を執拗に書こうとした詩人である。

広く知られているように、Apollinaire の父親は誰であるのか、ついに公には明らかにされないままに終わった。そういった秘密を持つゆえであろうか、自己、ひいては詩人である自己の誕生を主題に二つのロマンを書いている。*L'Enchanteur pourrissant* と *Le Poète assassiné* である。しかし、これらのロマンは Apollinaire の実人生を大胆に変えたものであり、かつ理想化したものである。一方に若くして辛酸をなめさせられてきた彼の实人生があり、他方に彼の書く「自伝」作品がある。*Le Poète assassiné* について Michel Décaudin は次のように言う<sup>1)</sup>。

*Le Poète assassiné* をもし自伝というなら、それは夢想された自伝(*autobiographie rêvée*)であって、詩人はそこに彼の空想ばかりか、彼の魂を深く揺り動かした波瀾の人生を投影したのである。

詩人は詩やロマンを書くという言葉の変換作用に精魂を傾けて、自分の人生を永遠に生きようとした。このことは逆に考えれば、Apollinaire は作品の中に自己を隠すことに心を砕いたともいえるのである。これは一種の mimétisme ではないだろうか。

*La Disparition d'Honoré Subrac* (*L'Hérésiarque et Cie* 収録) というコントに、危機の際、壁に変身を遂げる男の話が書かれているが、その男の行為を一つの mimétisme であるといい、次のように Apollinaire は定義している。

弱い生物は自分の外見を変えるという生まれつきの本能によって敵からの攻撃をかわすのである<sup>2)</sup>。

私生児として生まれ、フランス語とフランスをこよなく愛しながらも、なかなかフランス国籍を得られなかった Apollinaire は、生涯にわたって身の安全を保障するものや社会的安定を表すものを求め続けてきた。彼にとっては、詩人として言葉に変換作用があることを知っており、かつその術を心得ていたことが敵から身を守る彼の本能であったといえるだろう。

この小論では、詩における Apollinaire の *mimétisme* を考えてみたい。

《ZONE》は第一詩集である *Alcools* の巻頭詩であるが、彼の *mimétisme* 願望の破綻がかいま見える詩であると思われるので、この詩を主として取り上げたい。

《ZONE》はモデルニスムの旗印となる詩として知られているが、次の三つの点で多くの問題を含んでいる。

1. Blaise Cendrars の《Pâques à New York》に似ているということ<sup>3)</sup>。だから親交のあった Apollinaire は模倣したのではないか。もしそうなら Apollinaire の独創性はいったいどこにあるのか。
2. *Alcools* の巻頭詩であるがこの詩集の中では最後に書かれた作品である。*Alcools* の他の詩と明らかに相違した、Apollinaire の新しい詩法を表わしている作品である、というのが通説である。それではその新しい詩法とは何だろうか。
3. Apollinaire は自己を *orphée* として位置づけていたが、この詩ではどうだろうか。

これら三つの問題は深いところからみあっている。もし《ZONE》が《Pâques à New York》とは全く異なる独創的な作品であるとすれば、《ZONE》にある要素はすでに彼のものであるから、彼の他の作品の中にもその要素が見られるはずである。その要素とは何か。又それこそが新しい詩法なのであろうか、という問題である。Marie-Jeanne Durrty はその著 *Alcools*<sup>4)</sup>の中で《ZONE》が《Pâques》と似ているのは外見だけで、中身は全く異なるとし、《ZONE》における Apollinaire の独創性を説いている。私たちは勿論、Durrty の意見に異を称えるものではないが、ここでは《Pâques》と似ている外見を問題にしたい。なぜなら、*mimétisme* の問題は外見こそが重要なのであるから。しかし、Cendrars の詩を Apollinaire が読んで触発されて《ZONE》を書きあげたとか、あるいはそうでないとか、又 Cendrars との会話の中で啓発されたとか、あるいはそうでないとか、という事はここでは論じない。《ZONE》が生まれたグラウンドには、時代の力が深く関与しているように思われるからである。

この小論では、Durrty と Décaudin<sup>5)</sup>から指針を得て《Pâques》と似ている外見を指摘し、彼の *mimétisme* とは何かを述べ、又 *mimétisme* をするからには、何が彼の危機であったのかを《ZONE》が抱える第三の問題である *orphée* としての Apollinaire の存立の問題と関連づけて考

えてみたいと思う。

《ZONE》の原稿は三段階ある。

第一段階：草稿としての《ZONE》。L'Année Républicaine と題されたノートに書かれていたもの。以下(1)と表す。

第二段階：Les Soirées de Paris 11号1912年12月に発表されたもの。以下(2)と表す。

第三段階：Der Sturm 154号1913年4月に発表されたもので、これが最終稿である。以下(3)と表す。

詩的完成度は順次高くなってゆく。まず草稿から見ていきたい。これが Cendrars の《Pâques à New York》に最も似ている段階である。この草稿と第三段階の最終稿との相違を検討しながら《ZONE》の全体像をつかみたい。

草稿では、恋に破れた (Marie Laurencin との恋) 嘆きと苦しみが一人称で語られる。表現は直接的であり、時に生々しく醜い。語られる五つの主題にそって、どのような直接的表現であるか検討してみる。

冒頭から直接的である。(3)では、

A la fin tu es las de ce monde ancien

las de という表現は、この世界に対する嫌悪感を表すのに含みの多いことばである。又、漠然とした意味内容の形容詞でもある。これによって、《ZONE》は一つの謎の提示から始まることになる。それに対して(1)では

Je n'ai jamais vécu que dans un monde ancien

Je suis écœuré de vivre en ce monde ancien

L'Europe laide et fardée comme une vieille putain

嫌悪がはっきりと示され、この世界は醜くて真実がないとして否定されている。

この詩は Marie Laurencin との失恋の悲しみをベースにしているが、女性に対する嫌悪感も、また愛する対象を失って満たされぬ欲望も、(1)では露骨に表現されている。

Aujourd' hui je vais dans Paris les femmes sont ensanglantées  
J'ai peur de tout leur sang  
Leur menstres coulent dans les ruisseaux, l'air est infecté  
L'haleine des femmes est fétide et leur voix est menteuse  
L'amour dont je souffre est une maladie honteuse  
C'est une enflure ignoble dont je souhaite être guéri  
Elle me tient éveillé jusqu'au matin dans mon lit  
Elle me fait mourir d'un voluptueuse angoisse  
En songeant à la chair nue de ma maîtresse  
En songeant au corps de celle  
En songeant que le corps nu de mon ancienne maîtresse je l'embrasse

これに対して(3)では失恋の悲嘆や苦悩、又女性に対する嫌悪は注意深く秘められている。女性は〈image〉と〈métive〉という語に置き換えられている。また恋による苦しみは、「二十歳と三十の時に君は恋の苦しみを味わった」とうたわれるだけである。

貧しい者たち、疎外された者たちへの同情、それと同時に同族意識もこの詩の主題の一つであるが、上の二つの例と同じく(1)と(3)では表現方法が全く異なっている。

(3)ではサン・ラザール駅に集まる貧しい者たちをただアルゼンチンへと向かう移民とだけかいているが、(1)では彼らの出身もかいている。

Ils viennent de Russie, de Roumanie, il y a des Polonais

そのうえ、彼らと自分は同胞であると言い切っている。

moi en qui se mêle le sang slave et le sang latin

勿論 Apollinaire がポーランド系の母とおそらくはシチリア系であろう父との間に生まれたことを暗示している。ロシア、ルーマニア、ポーランドから来た移民たちの多くはユダヤ人であるが、彼らユダヤ人に対する記述は詳細である。貧しさゆえに移民のユダヤ人の女たちは売春婦となり、ついには自殺する羽目に追いこまれてしまうとかく。その筆致は痛ましい。

Les pauvres polonaises, les pauvres filles des campagnes

Sont emmenées par troupeaux en Allemagne  
De Hambourg on les expédie dans les bordels américains  
Dans ceux des ports de Chine ou encore an Transvaal  
Elles deviennent de lamentables prostituées  
Quand elles sont vieilles, elles n'ont plus qu'à se tuer

また、彼らは生まれつきは悪者ではないのに貧困である故に罪に陥ると書く。

Ils tombent dans le crime, ils tombent dans le sang  
Et beaucoup ne sont pas naturellement méchants

こういった描写は最終稿ではすべて削除されているが、(1)では五十行にわたって延々とかけられている。最終稿では、これらすべてが《édredon rouge》ひとつで象徴されている。詩全体の暗い色調を背景に《édredon》の赤は強烈である。《édredon》は羽根ぶとん。おそらくは幼い時からずっと使っているものであり、それに包まれて貧しい者たちは眠ってきたのであろう。彼らの夢、休息、悲しみ、喜び、苦悩すべてを《édredon》は包んでいる。だから《édredon》は情念ある魂そのものであるといえる。Apollinaire は社会から疎外された者たちの悲しい情念を具体的なこの一語で象徴させている。

Apollinaire は十字架にかけられたキリストに自分自身をたとえ、自分は三本の十字架の真中にいるという。一本の十字架は悔い改めた泥棒がかけられ、彼は不幸にも獄で死ぬ。もう一本は悔い改めなかった女のものであり、Apollinaire の命を奪う。この二者の間で生きていたがゆえに自分も捕らえられてしまうと歌う。これは勿論、ラ・サンテ刑務所に収監されたことを暗示している<sup>9)</sup>。このように Apollinaire は自分自身をしばしばキリストにたとえる。あるいはキリストにたとえられた男を主人公とする conte がいくつかある<sup>7)</sup>。彼はキリスト教に強い関心を持っていたが、同時にカトリック教義に対する情熱的な反抗心も持っていた。*L'Hérésiarque et Cie* はカトリシズムを爆破するための物語集であるともいえる。この詩においても Apollinaire は(1)では、はっきりと信仰を失ってしまったと言う。

J'ai perdu l'habitude de croire.

最終稿ではこの詩句はない。しかし非宗教的啓示で溢れている。非宗教的啓示を最終稿では《les Christes inférieurs》といっている。逆にこのことばは草稿には見られない。

Ils sont des christes d'une autre forme et d'une autre croyance  
Ce sont les Christes inférieurs des obscures espérances

見本, カタログ, ポスター, 名前のわからない美しい街, ヴィ修道院の瑠璃, 針が逆に廻るユダヤ人街の時計, 貧しい移民たち, 彼の部屋に置かれているオセアニアやギニアの未開人の札押物, 燃えているアルコール, 切り離された首のような太陽, そうして女たち, これらが《ZONE》における非宗教的啓示である。

非宗教的啓示となるものは, 貧しいもの, うら悲しいもの, この世から見捨てられたものばかりである。これらが最終稿では燃えるアルコール《cet alcool brûlant》へと収斂され, 爆発するエネルギーへと転化してゆく動きを見せる。しかし, (1)では今飲んでいるアルコールは本当は飲みたくない苦い酒なのである。酒を飲むことによって〈je〉は増々傷つくという。

Je suis triste d'être ici, je voudrais naviguer  
Vers de nouveaux pays où les nuits seraient gaies  
où il n'y aurait pas de malheureux dans les rues  
où l'on boirait des liqueurs inconnues  
Et non tous ces alcools brûlants comme ma vie

(1)では, この詩集自身の題名であるアルコールは象徴にならないままに終わる。  
太陽について(3)では一行のみ。

Soleil cou coupé

それに対して(1)では記述的に次のようにかかる。

Le soleil est là avec sa tête coupée  
C'est un cou tranché  
Comme l'auront peut-être un jour quelques-uns des pauvres que j'ai rencontrés  
Le soleil me fait peur, il répand son sang sur Paris  
Mais la lumière est belle et la lumière rit

(1)で《Une étoile après une étoile s'éteint》, (3)で《La nuit s'éloigne ainsi qu'une belle mêtive》  
とうとうからは, この太陽は朝日である。

《Soleil cou coupé》については Anne Clancier の《Ebauche d'une étude psychocritique de l'œuvre de Guillaume Apollinaire<sup>9)</sup>》に詳しい。Clancier は Soleil cou coupé は去勢を意味しているという。性的不能に対する恐れは Apollinaire の場合本質的であり、作品の隠された主題であるともいう。彼女は社会的自我《le Moi social》と創造的自我《le Moi créateur》という Charles Mauron の概念を借りてきて、Apollinaire の場合も Baudelaire と同じく《le Moi social》が不能であり、マゾシストであるのに対して《le Moi créateur》は自由であり創造する力を持っているという。不能、女性また血への恐れは草稿の方により色濃く出、しかも具体的に表現されている。最終稿では太陽の赤い光が始めは僅かな光であっても、やがて世界全体を覆ってしまうように、又手にしているワインが零れれば赤が彼の顔前に広がるように、不能や女性や血への恐れは強迫観念として象徴的に表現されている。

以上では最終稿で削除された部分ばかりを見てきたが、反対に草稿にはなくて最終稿にはあるものがある。それはキリストと飛行機に関する詩句であって、いわゆるこの詩のモデルニスムといわれる箇所である。燕、鴉、鷹、梟、アイビス、コウゾル、禿鷲、蜂雀、翼が一つしかなく番になって飛ぶピイスの鳥、鳩、琴鳥、孔雀、不死鳥など現実に存在する、あるいは存在しない鳥類を並べあげ、これらが皆、空飛ぶ機械《la volante machine》と仲良しになったとうたう。《L'Esprit nouveau et les Poètes》という1917年の講演の中で Apollinaire は次のように語る。「空中には奇妙に人間的な鳥がいっぱい飛んでいる。人間の娘であるが母を持たぬこれらの機械は、ひとつの生命を有するけれどもその情念とか感情は存在しない。これが新しいものでないことがあろうか<sup>10)</sup>？」この Apollinaire のことばも手伝って、多くの批評家は《ZONE》に彼のモデルニテの意識を見る。テーマにモデルニスムを見る。しかし、私たちはこれから順次述べるように、この詩がモデルニスムを意識して書かれたものであるとは考えない。Philippe Renaud が *Lecture d'Apollinaire*<sup>10)</sup>の中で Apollinaire のモデルニスムに異をとнаえているように、飛行機が美しいのは人間が非生命的なものをうみ出したその象徴としてであって、それは丁度、詩の始めの部分に出てくる若い街が無垢で樂園そのものであった幼年時代への回帰の象徴として好ましいのと同じである。Apollinaire にとってこの現代世界は失われた幸福を暗示するものとしてのみ意味があるのである。私たちは、この詩に溢れるイメージの一つとしてこの《la volante machine》の場合も、それが意味する内容よりも、先ずイメージが言葉に先行しているということに注意しておきたい。

以上主題別に見てきたように草稿と最終稿では表現方法が異なっている。草稿ではより具体的かつ生々しく表現されているのに最終稿では全てが象徴、イメージでもって表されている。このことは《ZONE》が成立していく上で、また Apollinaire の詩的發展を考えるうえでも重要なことであると思われる。後に述べるように《ZONE》は今まで彼が堅持してきた立場である orphée としての自己をかなぐり捨てて、彼の好む個人的神話や閉じられた詩的世界の内部から飛び出して



きた作品である。しかし草稿段階ではこのことは自覚されてはいなかったと思われる。パリを歩きまわって、現在と過去の間をさまよいながら Apollinaire は次第に奇妙な陶酔を味わう。陶酔の中では自我はもはや問題ではなく、orphée としての自我も崩れてゆく。次々と流れひしめき合うイメージの中で Apollinaire は物事の意味を問わない。言葉の意味も問わない。現在と過去が相互浸透していくように言葉はイメージと音のみが相互浸透し合い、啓示として Apollinaire に残る。最終稿に見られる啓示と化したイメージは、Apollinaire が神話や伝説の枠から出て、つまり彼が mimétisme を捨てて自我が危険な状態にある時に救いとなったものではないだろうか。だから草稿から最終稿に移る過程で、自我の動揺を表す《tu》と《je》との分裂、そしてイメージの先行とが同時に見られるのである。

## 二

次に Blaise Cendrars の《Pâques à New York》と《ZONE》の草稿ではどの点が似ているかを検討したい。Décaudin は、草稿から最終稿へ書き換えられていく過程はそのまま《Pâques》との類似点を消してゆく過程であるという。Durry は類似点が大きければ大きい程、相違点も大きいのであるという。似ている最大点は外的構成である。《Pâques》は全篇二行で区切られ、《ZONE》の草稿も二行で区切られている。最終稿ですら、区切りは場面毎になっているものの意味内容からみると二行ずつになっている。勿論 Durry の言うように、Apollinaire はこの distique については以前から知っていただろうけれども。また大都会を彷徨しながら生の現実につぎつぎとあい対し、それによってわきあがる逼迫した感情を痛切な表現で語る、という点でも両者はあい似ている。類似している詩句を掲げてゆこう。

大都会を歩く場面。《Pâques》では New York。《ZONE》では Paris である。(以下、P. は《Pâques》を Z. は《ZONE》の草稿を示す。)

P. Je descends à grands pas vers le bas de la ville

Z. Je marche dans Paris

地中海を歩くところ。

P. Je suis assis au bord de l'océan

Z. Et Maintenant je suis au bord de la Méditerranée

血に関するところ。

P. Les vitres des maisons sont toutes pleines de sang

Et les femmes, derrière, sont comme les fleurs de sang

Votre sang recueilli, elles ne l'ont jamais bu.

Z. Aujourd'hui je vais dans Paris les femmes sont ensanglantées  
J'ai peur de tout leur sang

貧しい者、移民に対する憐れみの場面。

P. Seigneur, la foule des pauvres pour qui vous fites le Sacrifice  
Est ici, parquée, tassée, comme du bétail, dans les hospices.  
D'immenses bateaux noirs viennent des horizons  
Et les débarquent, pêle-mêle, sur les pontons  
Il y a des Italiens, des Grecs, des Espagnols,  
Des Russes, des Bulgares, des Persans, des Mongols.

Z. Je regarde les yeux pleins de larmes ces pauvres émigrants  
Ils croient en Dieu ils prient les femmes allaitent des enfants  
Ils emplissent de leur odeur le hall de la gare Saint-Lazare  
Ils viennent de Russie, de Roumaine, il y a des Polonais

ユダヤ人に関するところ。

P. Seigneur dans les ghettos grouille la toure de Juifs  
Ils viennent de Pologne et sont tous fugitifs.

Z. Je les ai vus souvent le soir ils prennent l'air dans la rue  
Il y a surtout des juifs leur femmes portent perruque

売春婦に関するところ。

P. Elles sont polluées par la misère des hommes  
Je voudrais être Vous pour aimer les prostituées

Z. Elles deviennent de lamentables prostituées  
Quand elles sont vieilles, elles n'ont plus qu'à se tuer

十字架にかけられた二人の盗賊に関する場面。

P. Je pense aux deux larrons qui étaient avec vous à la Potence

Z. Entre les deux larrons comme Jésus mourut en croix

瑠璃に描かれた顔の場面。P. はキリストの顔、Z. は Apollinaire 自身の顔という相違はあるが。

P. Pour contempler dans un béryl l'intaille de votre image

Z. J'ai vu mon portrait dessiné naturellement dans les agates de Saint-Vit  
都会の夜を彷徨った後で「今、酒場にいる」と現在の自分の孤独をかみしめる場面。

P. Et me voici, assis, devant un verre de thé  
Je suis seul à present, les autres sont sortis,

Z. Je suis debout devant le zinc d'un bar crapuleux  
Je suis seul dans la nuit le matin va venir

朝日の場面。

P. Le soleil, c'est votre Face souillée par les crachats.

Z. Le soleil est là avec sa tête coupée

彷徨が終わって自分の家に戻る場面。

P. Seigneur, je rentre fatigué, seul et très morne...

Z. Je marche vers Auteuil je veux aller chez Moi à pied

信仰に触れる場面。

P. Je ne Vous ai pas connus alors — ni maintenant  
Peut-être que la foi me manque, Seigneur, et la bonté

Z. Mais j'ai perdu l'habitude de croire et la honte me retient  
D'entrer dans une église et de m'y confesser

何よりも自分が悲しく不幸であるという認識。

P. Je suis triste et malade.

Z. Je suis toujours malheureux et le jour et la nuit

以上、《Pâques à New York》と《ZONE》の草稿との類似点を掲げたが、扱われている素材は同一である。それでは Durry の言うところの、増々あい似るにつれて増々異なってゆく部分とは何であろうか。

まず、外面的な相異点から考えると、《Pâques》における時間は夜から始まり朝で終わる。太陽は一度だけ現われるのに対して《ZONE》は朝から始まり昼-夜を経て翌日の夜明けまでの丸一日の時間帯である。それゆえ朝日は二度現われる。次に空間設定であるが、両者共に大都会を彷徨する。しかし《Pâques》は家から出て家に戻るのに対して、《ZONE》は街に出ているところから始まり、さまよった後家に戻るのである。

次に内面的な相違点についてみてみよう。

Apollinaire の独創性を主張する Durry は、まず、二つの詩を支配している雰囲気は全くことになっている、という。つまり、《Pâques》の世界はいつも《peur》が支配している。Durry はそれを《unité de détresse》という。

J'ai peur des grands pans d'ombre que les maisons projettent

J'ai peur. Quelqu'un me suit. Je n'ose tourner la tête.

Un pas clopin-clopant saute de plus en plus près

J'ai peur

しかし《ZONE》には様々な感情が入り混じっている。この世界に対する嫌悪感から始まり、次に芸術や創造のよろこびが来る。幼い頃を思い出して郷愁と幸福の感情が入る。プラハに行った時の庭を思い浮かべ、優雅な感情に浸る。次に驚愕が来る。気狂いになった自分の顔が瑠璃に描かれているのを見て驚き死ぬほどさびしい思いをする。敬虔であった幼い頃はすでに遠く、苦笑いしか残されていない。パリの街をさまよいながら、Apollinaireの人生における色々な思い出や情景がそれぞれの土地を背景に語られる。それゆえ、そこには複雑多様な感情がみられる。

また Durrty の指摘するよに《Pâques》は神とのディアログである。ただし神は沈黙を守り、答えようとはしない。それに対し《ZONE》はモノローグである。ただしこれは草稿の段階までであり、第二段階の原稿および最終稿とは異なってくる。ここには Apollinaire の詩人としての存立の基盤の問題があり、次の章で論じたいと思う。

次に宗教に対する感情の相違である。《Pâques》では主人公は今までも信仰を持たなかったし、現在も神を知らないという。自分には信仰が欠けているという。しかし常に神に呼びかけている。

Je ne vous ai pas connu alors, — ni maintenant  
Je n'ai jamais prié quand j'étais un petit enfant  
Ce soir pourtant je pense à Vous avec effroi

奇跡について語るときも自己の信仰のなさをいう。

Mais je n'ai jamais assisté à ce spectacle  
Peut-être que la foi me manque

しかし、それにもかかわらず《Pâques》はキリストのまわりをためらいながらもまわって作られた詩である。いかなる時でも《Seigneur》という呼びかけに戻ってゆく。

これに対して《ZONE》に見られる宗教に対する感情はどうであろうか。Durrty は、《Pâques》はキリストのイメージのまわりをまわりながらもキリストに Non と言っているという。それに対して《ZONE》は何かうまくゆかないと感じはしているものの全体として Oui と答えているという。おそらく Durrty のこの考えは《Pâques》の最終行に因るのであろう。

Je suis trop seul. J'ai froid. Je vous appelle...  
Je pense, Seigneur, à mes heures malheureuses...  
Je pense, Seigneur, à mes heures en allées...

Je ne pense plus à Vous. Je ne pense plus à Vous.

いくら神に呼びかける litanie の形式はとっていても、Cendrars が歌っているのは、もはや神のいない憐れで孤独な現実なのである。神の愛の欠如をうたうことにより、一層苛酷な現実がうかびあがってくるのである。

《ZONE》は、Durry によればモデルニスムに対する挨拶と過去に対するノスタルジーであるという。そして、全体として宗教的なイメージよりも人間的イメージであり、神の愛の欠如に悩むよりも一人の女の愛を喪失したことでなやんでいる詩であるという。しかし、このことは《ZONE》の草稿から最終稿に至る過程でも異なってくる。草稿ではより《Pâques》に近く、Apollinaire は神のイメージにこだわり、神の愛の欠如による貧困や不幸を嘆いている。それが第二段階の原稿や最終稿では、Durry のいうように人間的イメージに、それも人間としての Apollinaire 自身が問題とされてくるのである。第二段階の原稿以降に現われる《la volante machine》はモデルニスムに対する挨拶であるよりは、人間 Apollinaire を救う非宗教的啓示の一つであると思われる。

以上見てきたように、《ZONE》の草稿と《Pâque》の素材はほとんど同一である。しかしそれと同時に素材に対する反応及び全体の調子は微妙に異なっている。これは何を意味するのであろうか。

《Pâque》と《ZONE》は二つの合わせ鏡である。同じテーマを互いに映し合い、映されたものをまた映し合って、どこまでも続いてゆくあの合わせ鏡である。少なくとも《ZONE》は《Pâques》を必要としていると私たちは思う。何故だろうか。《ZONE》は Alcools の他の詩と異なって、今まで Apollinaire が拒んできたものが表現されている。それは彼自身の生の声である。Apollinaire は生の声を表に出すことを避けてきた。それまでは、セイレーンの歌声伝説や中世の物語、ギリシャ・ローマ神話やキリスト教の象徴体系やイコノグラフィーの影にかくれて自分自身を歌ってきた<sup>11)</sup>。それを《ZONE》では捨てている。隠れる義は何も無くなっている。これは Apollinaire にとって一つの危機といえるのではないだろうか。その危機を引き出したのが他ならぬ《Pâques》の詩に見られる迫力ある人間の孤独な生の現実であったと私たちは考える。

### 三

モノログに関する問題と宗教の問題が草稿と第二段階の原稿および最終稿とでは異なっている。モノログの問題からみてゆきたい。

草稿ではモノログであるが、第二段階の原稿からディアログになる。ただし自己との対話である。すなわち《tu》が現われ、冒頭の詩句が次のように改められる。

Je n'ai jamais vécu que dans un monde ancien  
Je suis écoeuré de vivre en ce monde ancien

↓

A la fin tu es las de ce monde ancien

《tu》と《je》との絶え間ない往復運動を Durrty は《errance》, 《désarroi》と言っている。彼女によると、Rimbaud の《Je est un autre》がいたる箇所で見られ、観察者である主人公自身が観察の対象となる。冒頭の詩句はその幕開けである。その後、街の描写のあとに《je》がくる。

J'ai vu ce matin une jolie rue dont j'ai oublié le nom

この美しい街の記述の後に思い出が語られる。そこでは《tu》が用いられている。冒頭からここまでは、《je》は今、生きていて、行動し、見つめている自分であり、その《je》が過去の自分をまるで見知らぬ者を見るかのように観察する。だから《tu》は思い出の中に自己なのである。しかし一度思い出を語り始めるや現在の自分すらも流れゆく時の中の一存在と写り、現在の自己をすら、もはや《je》と呼べず《tu》と呼びかけることになる。

Maintenant tu marches dans Paris tout seul parmi la foule

これと同じことが《tu》—《je》にもおこる。過去の思い出があまりにも強烈であれば《tu》とならず《je》となる。このように過去と現在の間をパリやあらゆる思い出の土地を通して絶え間なく往復運動すること、それが《ZONE》に表れる《tu》と《je》であると Durrty はいう。《tu》と《je》についてもう少し考えてみたい。

《je》というのは現在の確かな感覚と主体性の意識において使われる。それに対して《tu》は詩が始まるまでは何も知らされていない存在である。「君は云々なんだ」「君はここを歩いている」と一つ一つ知らされることによって《tu》は自己を知ってゆく。しかし、主体性はあらかじめ奪われおり、《tu》は《je》の影<sup>12)</sup>でしかない。しかも Durrty のいうように、本来《je》となるべき箇所も《tu》に、又《tu》となるべきところが《je》となっているからには《je》も《tu》と同じく主体性をどんどん奪われてゆく。丁度それは je と tu という二枚の鏡の間に Apollinaire が立っていて、二枚の鏡が反射し合う毎に主体性及び存在の基盤を失ってゆくかのである。Apollinaire は草稿段階の《je》を捨てて、*Les Soirées de Paris* で《je》と《tu》を使った時に初めて自分自身の存在を問題にしたのではないか。人間としての自己、詩人としての自己、従って今ま

で書いてきた詩そのものをも検討の対象にしたのである。

それまで Apollinaire は詩人であることを自認し、又詩人は orphée でなければならないと考えていた。それは1911年に出版された詩画集 *Le Bestiaire ou Cortège d'Orphée*<sup>13)</sup>をみてもわかる。Apollinaire と orphée の関連については Madeleine Boisson が《Orphée et Anti-Orphée dans l'Œuvre d'Apollinaire<sup>14)</sup>》と題した論文で論じている。

Boisson はまず Apollinaire が気狂い王《le roi fou》に関心をもっていたことを示す<sup>15)</sup>。《le roi fou》とはババリア王、ルードヴィヒ二世 (Louis II de Bavière) のことである。このことと、《La Chanson du Mal Aimé》(*Alcools* 収録) とを結びつけて分析する。つまり、orphée は愛する人 (l'amant) であり、音楽の力を持つ人であり、音楽によって死から逃れうる人の謂である。それに対し、Le roi fou は誰をも愛さず、音楽の虜となり (Wagnerien)、それがために湖に身を投げて死んでしまった王である。それゆえ、王は Anti-Orphée であるということが出来る。この王と同様に Apollinaire も愛を失い<sup>16)</sup>、激しい嫉妬に苦しめられるが、la Seine の流れる Paris に身を沈めることなく詩人としての自尊心を発見する。しかしこの自尊心は自己の愛を詩に創造することによって得られたものである。愛の喪失と、それゆえに気狂いになるのではないかとおそれて、Anti-Orphée である le roi fou との親近性を感じていた Apollinaire は、苦悩に満ちた現実世界を芸術作品の形に再創造することで Anti-Orphée から Orphée に変身し、自己を完成させる。以上が Boisson の論文の要旨である。

Boisson の論が《La Chanson du Mal Aimé》と結びつけられて論じられているように、《ZONE》が書かれる以前は彼は彼の情念が芸術作品に、つまりひとつの神話にまで高められることを望んでいた。それらは閉じられた作品である。そのために彼はギリシャ・ローマ神話、キリスト教の象徴体系、イコノグラフィーあるいは中世の伝説を詩の構造に取り入れて、ひとつの閉じられた象徴の世界を創造しようとしたのである。これは神話の中に生の自己を隠してきたといえるかもしれない。

彼は仮面 masque が好きで、masque を取り扱った作品がいくつかある。この場合も masque の下に生の自己を隠そうとしたのであるといえる。「この仮面はね、君が知りたいと思うようなこと、見たいと思うようなことの一切を隠しているんだよ。君がこの世に戻ってきて以来の、あらゆる疑問に対する答えを秘めているし、あらゆる予言を啞みたいに黙らしてしまうのだ。この仮面のおかげで、君はもはや真実を知ることができまい<sup>17)</sup>」(*Le Poète assassiné*) masque も mimétisme の一つの変種であるといえる。

しかし《ZONE》ではこの masque も「神話」もすべてを捨てている。詩人は orphée としての自己の存立をもはや考えない。作品をつくることによって成立した orphée としての自己は、失われようとしている過去の「聖性」と「神秘」の上によりかかっていたのではなかったか。だから、彼はこの詩で自己の存立と同時に今までの全作品の意味をも問うているのである。そこに《je》と

《tu》との分裂がうまれるのである。この詩にモデルニスムが刻印されているとは思えない。むしろ Apollinaire は masque や神話を捨てたようにモデルニスムをも捨てていると思われる。Alcools において《ZONE》と他の作品とをひき離しているものはこの生の声であって、従って Apollinaire の自己に対する危機意識であると思われる。

ところで orphée としての自己の中に生の自己を隠すためには造型が必要である。造型意識は、詩人として出生の始めから社会より疎外された世界に住んでいた彼が、彼をとりまく圧倒的な力と対抗して自我を守るために必要なものであったと思われる。と同時に深く時代とも関係していたであろう。キュビズムがそれである。Apollinaire の最も敬愛した友人の一人であるピカソは、1907年の春から制作にかかり秋に完成した『アヴィニヨンの娘たち』から約十年間にわたってキュビズムを探究した。この時期は Apollinaire の詩人としての生涯の最も重要な時期と重なっている。キュビズムの時代とはピカソが構成的主題と真正面から取り組んだ時期であり、彼は専ら造型的探求にすべてを捧げた。その間に制作された絵には、彼の古典主義的とまでいえる理性の支配を感じることができる。この時代の芸術の流れを広く検討しなければならないが、Apollinaire が、この時期のピカソから影響をうけないはずはなかった。第二詩集 *Calligrammes* に見られる造型的要素、不思議な理性の支配はピカソに負っているのではないだろうか。《ZONE》以前の Apollinaire が masque や神話に身を隠したように、今度は造型に身を隠したといえないだろうか。《ZONE》はこの二つの亀裂に生まれた詩であって、Cendrars の《Pâques》はその誘い水になったのだと思われる。

何らの隠れ蓑もない、したがって動揺そのものの Apollinaire の自我意識は夢遊病者のように過去と現在、そしてパリや思い出の数々の場所をさまよう。Cendrars はたとえ否定はしても神のイメージのまわりをまわっていたが、Apollinaire はもう《la croix》さえ見ない。今はただ何もかもが分からなくなってしまった人のように自分の手すらまともに見られないのである。Les Soirées de Paris では《Tu n'oses plus regarder la croix et à tous moments tu voudrais sangloter》となっていたのが、最終稿では《la croix》が《tes mains》に変えられる。そのことは宗教的な啓示や象徴がもはや何の意味ももたなくなったことを示しているように思われる。Apollinaire は《ZONE》で動揺した自我そのままの形で彼自身になったのである。Apollinaire がこの《ZONE》の末尾にのみ自己の名をサインしたのは暗示的ではないだろうか。

## 註

- 1) Michel Décaudin, 《Apollinaire à la recherche de lui-même》, in *Cahiers du Sud*, n 386 janviers-mars, 1966, p. 10



- 2) Guillaume Apollinaire, *Œuvres en prose*, Pléiade, 1977, p. 173
- 3) 《Pâques à New York》からの引用は Blaise Cendrars, *Œuvres complètes*, Edition Denoël による, Décaudin の *Le Dossier d'Alcools* によると, 《Pâques à New York》に似ていることに最初に目をつけたのは Robert Goffin で(Entrer en Poésie)あった。しかし解答は得られていない。《ZONE》は1912年の9月又は10月に脱稿されている。一方, 《Pâques》は Cendrars の雑誌 *Les Hommes nouveaux* 10月号に, 10月26日に Hors Série で発表されると予告されている。又, Jean Mollet が *Les Lettres Françaises* (1948年11月11日)に掲載した話によると, Apollinaire は受けとったばかりの《Pâques》を Mollet に見せ, 《ZONE》に似ていることに注意をうながせたらしい。この話は本当のような気もするが, だからといって《ZONE》が《Pâques》よりも早く書かれたと断定できない。いずれにしても, と Décaudin は続ける。二人の詩人は親交があったが, 私たちは今や彼らの会話の内容を知りもできない。Durry は, 何故 Cendrars と Apollinaire がこの問題に対して, はっきりした態度をとらなかったのか, それが一番不可解だとしている。
- 4) Marie - Jeanne Durry, *Guillaume Apollinaire Alcools*, Société d'Édition d'Enseignement Supérieur, 1978, Tome 1 p. 233
- 5) Michel Décaudin, *Le Dossier d'Alcools*, Librairie Droz, 1971年, pp. 73~89  
草稿, *Les Soirées de Paris* に発表された《ZONE》, *Der Sturm* に発表された《ZONE》もこれによる。
- 6) 1911年9月7日~12日 ラ・サンテ刑務所に収監される。理由は知人であり寄宿人でもある Géry Piéret がルーヴル博物館から彫像を盗み, Apollinaire の家に隠したり, Apollinaire や Picasso に売ったりした。それゆえ盗品隠匿および共犯の容疑で逮捕, 収監される。
- 7) 《Simon Mage》(*L'Hérésiarque et Cie*) もその一つである。
- 8) Anne Clancier, 《Ébauche d'une étude psychocritique de l'œuvre de Guillaume Apollinaire》, in Guillaume Apollinaire II, 1972年
- 9) Guillaume Apollinaire, 《L'Esprit nouveau et Les Poètes》, in *Le Mercure de France*, 1918年12月1日号
- 10) Philippe Renaud, *Lecture d'Apollinaire*, Edition L'Age d'Homme, 1969年, pp. 91~96
- 11) たとえば *Alcools* に収められている《Rhénanes》の一つに《La Loreley》があるが, これはいうまでもなく「セイレーン伝説」にもとづいている。ホメロスの『オデュッセイア』第12歌にセイレーンの歌に関するくだりがある。そこではまず, キルケーからオデュッセウスに, セイレーンに関して警告がなされ, ついで船出したオデュッセウスが部下たちにキルケーの予言を伝え, 最後にかねらとセイレーンとの出逢いが語られる。かたわらを過ぎる者をいやおうなく破滅へとひきずりこむセイレーンの圧倒的な力に「女」をたとえ, Apollinaire は愛する女との距離感, 関係性を歌っている。
- 12) 肉体から離れて影だけが歩きまわる話が Apollinaire の作品にはいくつかある。そのひとつの《La Promenade de l'ombre》で Apollinaire は次のようにいう。「(肉体から離れた)影は確かに存在する。それは私たちが記憶の中に輪郭をなぞることができ, また思い出すと青みがかった微妙なものがからみついているあの心の中の影と同じように存在する。」又, 詩《L'Émigrant de Landor Road》には《des ombres sans amour》とある。愛を失った影は主体性を奪われた影と同義ではないだろうか。
- 13) *Le Bestiaire ou Cortège d'Orphée* は動物あるいは虫, 魚を題名にとって詩が作られている。Orphée がついている題名からも推察されるが, たとえそれらの魚, 虫, 動物の題を《Le Poète》と置き換えても一向に構わないように思われるむきがある。
- 14) Madeleine Boisson, 《Orphée et Anti-orphée dans l'œuvre d'Apollinaire》, *Guillaume Apollinaire* 9, 1970年

- 15) le roi fou をテーマにした conte に《Le Roi-Lune》がある。又、《Le Passant de Prague》でも言及されており、Apollinaire は度々とりあげている。le roi foi と Apollinaire の誕生日が同じく 8 月 25 日であることから一層 Apollinaire は親近感を持った。
- 16) この場合の恋人は Annie Playden である。プラハに行った頃、Annie に愛されないため、jalousie folle から fou になるのではないかと怖れていた。
- 17) Guillaume Apollinaire, *Œuvres en prose*, Pléiade, 1977 p. 383.

## ZONE

- 1 A la fin tu es las de ce monde ancien  
 Bergère ô tour Eiffel le troupeau des  
 ponts bêle ce matin  
 Tu en as assez de vivre dans l'antiquité  
 grecque et romaine  
 Ici même les automobiles ont l'air d'être  
 anciennes  
 5 La religion seule est restée toute neuve  
 la religion  
 Est restée simple comme les hangars de  
 Port-Aviation  
 Seul en Europe tu n'es pas antique ô  
 Christianisme  
 L'Européen le plus moderne c'est vous  
 Pape Pie X  
 Et toi que les fenêtres observent la  
 honte te retient  
 10 D'entrer dans une église et de t'y confes-  
 ser ce matin  
 Tu lis les prospectus les catalogues les  
 affiches qui chantent tout haut  
 Voilà la poésie ce matin et pour la prose  
 il y a les journaux  
 Il y a les livraisons à 25 centimes pleines  
 d'aventures policières  
 Portraits des grands hommes et mille  
 titres divers  
 15 J'ai vu ce matin une jolie rue dont j'ai  
 oublié le nom  
 Neuve et propre du soleil elle était le  
 clairon  
 Les directeurs les ouvriers et les belles  
 sténo-dactylo-graphes  
 Du lundi matin au samedi soir quatre  
 fois par jour y passent  
 Le matin par trois fois la sirène y gémit

## 地帯

- 1 とうとう君はこの古い世界に倦きてしま  
 った  
 羊飼いや お エッフェル塔よ 橋の群  
 れが今朝も変わらず鳴いている  
 君はギリシャ ローマの古代文明のなか  
 で生きるのが嫌になった  
 いまでは自動車さえもが古ったらしい  
 5 宗教だけがいつまでも新しく  
 宗教は空港の格納庫のように単純なま  
 だ  
 ヨーロッパではただ一つ キリスト教  
 おお おまえだけが古くない  
 最も現代的なヨーロッパ人 それは法王  
 ビオ十世 あなただ  
 それなのに 教会の窓が君を見ているの  
 ではずかしくて  
 10 今朝君は教会に入れず 懺悔もしない  
 君は声高くうたう見本や カタログ ポ  
 スターを読む  
 それが今朝の詩だ 散文には新聞  
 それから警察沙汰でいっぱいの二十五サ  
 ンチームの週刊誌や  
 有名人の写真や たくさんのいろんな見  
 出しがある  
 15 僕は今朝きれいな街路を見た が名前は  
 忘れてしまった  
 新しくて清潔でその街は太陽のラッパだ  
 った  
 支配人や労働者や美人のタイピストたち  
 が  
 月曜の朝から土曜の晩まで 日に四回こ  
 こを通る  
 朝には三度 この街にサイレンがひびき  
 20 十二時頃には鐘がはげしく鳴る  
 看板や壁の文字が  
 標識や告示がオームみたいにわめいてい

- 20 Une cloche rageuse y aboie vers midi  
Les inscriptions des enseignes et des  
    murailles  
Les plaques les avis à la façon des  
    perroquets criaillent  
J'aime la grâce de cette rue industrielle  
Située à Paris entre la rue Aumont-  
    Thiéville et l'avenue des  
    Ternes
- 25 Voilà la jeune rue et tu n'es encore qu'un  
    petit enfant  
Ta mère ne t'habille que de bleu et de  
    blanc  
Tu es très pieux et avec le plus ancien  
    de tes camarades René Dalize  
Vous n'aimez rien tant que les pompes  
    de l'Église  
Il est neuf heures le gaz est baissé tout  
    bleu vous sortez du dortoir en  
    cachette
- 30 Vous priez toute la nuit dans la chapelle  
    du collègue  
Tandis qu'éternelle et adorable profon-  
    deur améthyste  
Tourne à jamais la flamboyante gloire  
    du Christ  
C'est le beau lys que tous nous cultivons  
C'est la torche aux cheveux roux que n'  
    éteint pas le vent
- 35 C'est le fils pâle et vermeil de la doulour-  
    euse mère  
C'est l'arbre toujours touffu de toutes le  
    s prières  
C'est la double potence de l'honneur et  
    de l'éternité  
C'est l'étoile à six branches  
C'est Dieu qui meurt le vendredi et res-  
    suscite le dimanche
- 40 C'est le Christ qui monte au ciel mieux  
    que les aviateurs  
Il détient le record du monde pour la  
    hauteur

る  
ばくにはこの工場街が魅力的だ  
オーモン＝ティエヴィル街とテルヌ通り  
の間のパリのこの一画

- 25 さて若い街だ 君はまだほんの少年  
君のお母さんは君に紺と白しか着せない  
君はとても信心深く 君のもっとも古い  
    友ルネ・ダリーズといっしょだ  
君達は教会の壮麗さが何よりも好きだ  
九時 ガス燈が細められて青く 君たち  
    はこっそり共同寢室を抜け出す
- 30 君たちは学院の礼拝堂で一晩中祈りつづ  
    ける  
その間 永遠の 崇むべき 紫水晶色を  
    した深遠なもの  
キリストの燃えるような栄光がいつまで  
    もめぐっている  
それは僕らみんなが育てる美しい百合の  
    花  
それは風も消すことのない赤毛を束ねた  
    松明
- 35 それは悩める母の 青白いしかも真っ赤  
    な息子  
それは祈りという祈りの永久に茂る樹木  
それは栄誉と永遠性の二本の腕木だ  
それは六つの枝をもつ星  
それは金曜に死んで日曜に甦る神
- 40 それは飛行士よりも上手に天空に昇るキ  
    リストだ  
彼は高度の世界記録保持者だ
- 瞳孔よ 眼のキリストよ  
諸世紀の二十番目の孤児は ぬけ眼がな  
    い  
鳥になったこの世紀はイエスのように空  
    にのぼる
- 45 地獄の悪魔どもが顔をあげて彼をみる  
彼らは あれはユダヤの魔術師シモンを  
    まねているのだと言う  
彼らは叫ぶ 飛べるのなら泥棒と呼ぶぞ  
    と  
この美しい飛行家のぐるりを天使たちが

Pupille Christ de l'œil  
 Vingtième pupille des siècles il sait y  
 faire  
 Et changé en oiseau ce siècle comme  
 Jésus monte dans l'air  
 45 Les diables dans les abîmes lèvent la  
 tête pour le regarder  
 Ils disent qu'il imite Simon Mage en  
 Judée  
 Ils crient s'il sait voler qu'on l'appelle  
 voleur  
 Les anges voltigent autour du joli  
 voltigeur  
 Icare Enoch Elie Apollonius de Thyane  
 50 Flottent autour du premier aéroplane  
 Ils s'écartent parfois pour laisser passer  
 ceux que transporte la Sainte-  
 Eucharistie  
 Ces prêtres qui montent éternellement  
 élevant l'hostie  
 L'avion se pose enfin sans refermer les  
 ailes  
 Le ciel s'emplit alors de millions d'hiron-  
 delles  
 55 A tire-d'aile viennent les corbeaux les  
 faucons les hiboux  
 D'Afrique arrivent les ibis les flamants  
 les marabouts  
 L'oiseau Roc célébré par les conteurs et  
 les poètes  
 Plane tenant dans les serres le crâne d'  
 Adam la première tête  
 L'aigle fond de l'horizon en poussant un  
 grand cri  
 60 Et d'Amérique vient le petit colibri  
 De China sont venus les pihis longs et  
 souples  
 Qui n'ont qu'une seule aile et qui volent  
 par couples  
 Puis voici la colombe esprit immaculé  
 Qu'escortent l'oiseau-lyre et le paon  
 ocellé.  
 65 Le phénix ce bûcher qui soi-même s'

飛びまわる  
 イカロス エノク エリヤとテュアナの  
 アポロニウスが  
 50 最初の飛行機のまわりに浮かぶのだ  
 彼らがときおりわきへ寄るのは聖体がも  
 たらすものにいけにえをかかげ  
 永久に高くのぼり続ける司祭たちに道を  
 ゆずるためだ  
 飛行機はついに翼をひろげたまま着陸す  
 る  
 天空はそのとき幾百万という燕でいっぱい  
 だ  
 55 羽搏いて カラスが鷹がフクロウが来る  
 アフリカからは トキがフラミンゴがハ  
 ゲコウがやってくる  
 物語作者や詩人らがほめたたえるアラビ  
 アのロック鳥は  
 人類最初の頭 アダム<sup>アダム</sup>の頭蓋を爪につか  
 んで舞っている  
 鷺はひと声するどく叫びながら地平から  
 やってき  
 60 アメリカからは小さな蜂雀が  
 シナからは翼が一つしかなく 番になっ  
 て飛ぶ  
 あの翼の長くしなやかなピイスの鳥がや  
 ってきた  
 それから琴鳥と 眼状斑のクジャクに守  
 られた  
 純潔な霊 鳩がいる  
 65 自分の力で甦る火刑台の不死鳥は  
 一瞬 すべてをその熱い灰で蔽うのだ  
 セイレーンも 危険な海峡をあとにして  
 三羽とも美しい声で歌いながらやってく  
 る  
 そして鷺も 不死鳥も シナのピイス鳥  
 も  
 70 みんな空飛ぶ機械と仲良しになる  
 いま君はバリを歩いている 群衆のなか  
 を独りぼっちで  
 君のそばをバスの群れがうなりながら走  
 る  
 恋の不安は君の喉をしめつける

engendre  
 Un instant voile tout de son ardente  
 cendre  
 Les sirènes laissant les périlleux  
 détroits  
 Arrivent en chantant bellement toutes  
 trois  
 Et tous aigle phénix et pihis de la Chine  
 70 Fraternisent avec la volante machine  
  
 Maintenant tu marches dans Paris tout  
 seul parmi la foule  
 Des troupes d'autobus mugissants  
 près de toi roulent  
 L'angoisse de l'amour te serre le gosier  
 Comme si tu ne devais jamais plus être  
 aimé  
 75 Si tu vivais dans l'ancien temps tu  
 entrerais dans un monastère  
 Vous avez honte quand vous vous sur-  
 prenez à dire une prière  
 Tu te moques de toi et comme le feu de  
 l'Enfer ton rire pétile  
 Les étincelles de ton rire dorent le fond  
 de ta vie  
 C'est un tableau pendu dans un sombre  
 musée  
 80 Et quelquefois tu vas le regarder de près  
  
 Aujourd'hui tu marches dans Paris les  
 femmes sont ensanglantées  
 C'était et je voudrais ne pas m'en souve-  
 nir c'était au déclin de la  
 beauté  
  
 Entourée de flammes ferventes Notre-  
 Dame m'a regardé à Chartres  
 Le sang de votre Sacré-Cœur m'a inon-  
 dé à Montmartre  
 85 Je suis malade d'ouïr les paroles bien-  
 heureuses  
 L'amour dont je souffre est une maladie  
 honteuse

もう愛されることはきつとないだろうと  
 75 君がもし昔の人なら 僧院にでも入ると  
 ころだ  
 思わず祈ってしまう自分が君たちは恥ず  
 かしい  
 君は自分を嘲笑する と地獄の火のよう  
 に君の笑いがもえさかる  
 その笑いの火の粉は 君の命の背景を金  
 色にそめる  
 それは暗い美術館にかけられた一枚の絵  
 だ  
 80 しかも君はときおり近寄って それに眺  
 め入るのだ  
  
 今日 君はバリを歩く 女たちは血まみ  
 れ  
 思い出したくないんだが それはやっぱ  
 り美の衰弱のしるしだ  
  
 燃える炎にかこまれて 聖母像がシャル  
 トルで僕を見つめた  
 サクレ=クールの血がモンマルトルで僕  
 をそめた  
 85 福音を聴いて僕は病気になった  
 僕が苦しんでいる恋は 一種の花柳病だ  
 君から離れないあの面影のために 君は  
 不眠にも苦悩に耐えて生きながらえて  
 いる  
 あの通りすぎていく面影は いつも君の  
 そばにあった  
  
 いま 君は地中海のほとりの  
 90 年中花咲くレモンの木の下にいる  
 友人たちと連れだって君は舟遊びをする  
 一人はニサル人で 一人はマントンの  
 男それに二人のチュルビの男  
 僕たちはぞっとしながら深海の蛸を見つ  
 める  
 それに海草の間を救い主の姿をした魚た  
 ちが泳いでいる  
  
 95 君はブラハの郊外の宿屋の庭にいる  
 テーブルに一輪のバラがあって 君は無

Et l'image qui te possède te fait sur-  
vivre dans l'insomnie et dans  
l'angoisse  
C'est toujours près de toi cette image  
qui passe

Maintenant tu es au bord de la Méditer-  
ranée

90 Sous les citronniers qui sont en fleur  
toute l'année  
Avec tes amis tu te promènes en barque  
L'un est Nissard il y a un Mentonasque  
et deux Turbiasques  
Nous regardons avec effroi les poulpes  
des profondeurs  
Et parmi les algues nagent les poissons  
images du Sauveur

95 Tu es dans le jardin d'une auberge aux  
environs de Prague  
Tu te sens tout heureux une rose est sur  
la table  
Et tu observes au lieu d'écrire ton conte  
en prose  
La cétaine qui dort dans le cœur de la  
rose

Épouvanté tu te vois dessiné dans les  
agates de Saint-Vit

100 Tu étais triste à mourir le jour où tu t'  
y vis  
Tu ressembles au Lazare affolé par le  
jour  
Les aiguilles de l'horloge du quartier  
juif vont à rebours  
Et tu recules aussi dans ta vie lentement  
En montant au Hradchin et le soir en  
écoutant

105 Dans les tavernes chanter des chansons  
tchèques

Te voici à Marseille au milieu des pastè-  
ques

僕に幸福だ  
君は物語を書かないで バラの芯に眠る  
オオハナムグりをじっと見ている

ヴィ修道院の瑤瑤に 自分が描かれてい  
るのを見て君は愕然とする

100 そこに君は自分を見て死ぬほどさびしか  
った  
君は日の光に狂いそうになったあのラザロ  
にそっくりだ  
ユダヤ人街の大時計の針はさかさにまわ  
る  
君も君の人生のなかでゆっくりしりぞい  
てゆく  
プラハの旧市街の坂をのぼったり 晩に  
なると

105 居酒屋でチェコの歌のうたわれるのを聴  
いたりして

君はマルセイユにいる 西瓜畑にとりか  
こまれて

君はコブレンツにいる 巨人ホテルに

君はローマにいる 枇杷の木の下に坐っ  
て

君はアムステルダムにいる 醜いけれど  
君が美しいと思っている娘といっしょ  
に

110 彼女はライデンの学生と結婚するはずだ  
そこでラテン語で Cubicula locanda と書  
かれた部屋をかりる  
僕は思い出す そこで三日 それからグ  
ーダで三日過ごしたことを

君はパリにいる 予審判事のところに  
罪人として君は逮捕されている

115 君は虚偽と年齢に気づくまでは  
苦しくも楽しい旅をいくつもの  
君は二十歳と三十の時に恋に苦しんだ  
僕はばかみたいに生き そして時を失っ

Te voici à Coblenz à l'hôtel du Géant  
Te voici à Rome assis sous un néflier du Japon  
Te voici à Amsterdam avec une jeune fille que tu trouves belle et qui est laide  
110 Elle doit se marier avec un étudiant de Leyde  
On y loue des chambres en latin Cubicula locanda  
Je m'en souviens j'y ai passé trois jours et autant à Gouda  
Tu es à Paris chez le juge d'instruction Comme un criminel on te met en état d'arrestation  
115 Tu as fait de douloureux et de joyeux voyages  
Avant de t'apercevoir du mensonge et de l'âge  
Tu as souffert de l'amour à vingt et à trente ans  
J'ai vécu comme un fou et j'ai perdu mon temps  
Tu n'oses plus regarder tes mains et à tous moments je voudrais sangloter  
120 Sur toi sur celle que j'aime sur tout ce qui t'a épouvanté  
Tu regardes les yeux pleins de larmes ces pauvres émigrants  
Ils croient en Dieu ils prient les femmes allaitent des enfants  
Ils emplissent de leur odeur le hall de la gare Saint-Lazare  
Ils ont foi dans leur étoile comme les rois-mages  
125 Ils espèrent gagner de l'argent dans l'Argentine

た  
君は自分の手をもうよう見ない そして  
いつも僕は泣きたいのだ  
120 君のこと 僕の愛する娘のこと きみを  
恐れさせた一切のことで  
君は眼に涙をいっばいたためて あのあわれな移民たちを見ている  
彼らは神を信じている 彼らは祈る 女たちは子供たちに乳をふくませている  
彼らは自分たちのにおいでサン・ラザール駅をみたしている  
彼らは東方の博士のように自分たちの星を信じている  
125 彼らはアルゼンチンで金をもうけ  
ひと財産つくってから国に戻りたい  
ある一家は君が心をひきずっているように赤い毛布を持ち歩いている  
この毛布も僕たちの夢も同じく非現実的だ  
何人かの移民たちはここにとどまって  
130 ロジェ街やエクーフ街の廃屋に住む  
僕はしばしば晩になって彼らを見た 彼らは道に出て風に吹かれていたが  
将棋の駒みたいにめったに動かない  
おもにユダヤ人だ 彼らの女たちはかつらをつけて  
店の奥に 血の気のない顔をして坐っていた  
135 君はいま怪しげな酒場のカウンターにいる  
不幸な人たちにまじって ニスーのコーヒーを飲んでいる  
夜 君は大きなレストランにいる  
女たちは意地悪なのではない ただ悩む  
ごとをもっているのだ  
どの女も もっとも醜い女ですら 男を苦しめてきた  
140 彼女はジャーシーの巡査の娘だ



Et revenir dans leur pays après avoir  
fait fortune  
Une famille transporte un édredon  
rouge comme vous transportez  
votre cœur  
Cet édredon et nos rêves sont aussi  
irréels.  
Quelques-uns de ces émigrants restent  
ici et se logent  
130 Rue des Rosiers ou rue des E < couffes  
dans des bouges  
Je les ai vus souvent le soir ils prennent  
l'air dans la rue  
Et se déplacent rarement comme les  
pièces aux échecs  
Il y a surtout des Juifs leurs femmes  
portent perruque  
Elles restent assises exsangues au fond  
des boutiques  
135 Tu es debout devant le zinc d'un bar  
crapuleux  
Tu prends un café à deux sous parmi les  
malheureux  
Tu es la nuit dans un grand restaurant  
Ces femmes ne sont pas méchantes elles  
ont des soucis cependant  
Toutes même la plus laide a fait souffrir  
son amant  
140 Elle est la fille d'un sergent de ville de  
Jersey  
Ses mains que je n'avais pas vues sont  
dures et gercées  
J'ai une pitié immense pour les coutures  
de son ventre  
J'humilie maintenant à une pauvre fille  
au rire horrible ma bouche

これまで見たことのなかった彼女の手は  
固くてひびが切れていた  
僕は彼女の腹の傷あとにいいようのない  
憐れさを感じる  
僕はいま ひどい笑い方をする一人のか  
わいそうな娘に 自分の唇をさし出す  
君はひとりぼっち もうすぐ朝がくる  
145 牛乳配達が往来で彼らの缶を鳴らす  
夜は遠ざかる 美しい女メティスのよう  
に  
それは不実な女フェルディーヌか 優し  
いレアか  
そして君は飲む このもえるアルコール  
を君のいのちのように  
一杯の火酒のように君は飲む 君のいの  
ちを  
150 君はオートイユのほうへと歩く 歩いて  
家へ帰り  
オセアニアとギニアの彫像に囲まれて眠  
りたいのだ  
これらの彫像は別な形 別な信仰のキリ  
ストだ  
これら混沌とした希望の垂流のキリスト  
だ  
さようなら さようなら  
155 太陽 切られた首よ

(訳出は堀口大学訳と飯島耕一訳を参考  
にした。)

Tu es seul le matin va venir

145 Les laitiers font tinter leurs bidons dans  
les rues

La nuit s'éloigne ainsi qu'une belle  
Métive

C'est Ferdine la fausse ou Léa l'atten-  
tive

Et tu bois cet alcool brûlant comme ta  
vie

Ta vie que tu bois comme une eau-de-  
vie

150 Tu marches vers Auteuil tu veux aller  
chez toi à pied

Dormir parmi tes fétiches d'Océanie et  
de Guinée

Ils sont des Christ d'une autre forme et  
d'une autre croyance

Ce sont les Christ inférieurs des  
obscurités

Adieu Adieu

155 Soleil cou coupé